

鴨山の磐根かなしも人麿の妹を思ふ歌讀めばいやさら  
歌詠めど微臣はあはれ死年もわかで石見の旅に死ににき

在原業平

ほのかなる夢に心を誘ふゆゑ在中將の歌はめでたし  
業平の歌見ておもふ京極の右近の馬場の址やいづこと  
業平が小野のわび居に惟喬の親王をたづねし日にも似る雪  
業平のさすらひの旅思ふとき身につまされて勢語さびしも  
歌のみを見ればせんなし業平のその雄ごころを人し知らずも

小野道風

三蹟の一人と思へば道風の文字はかしこしほのぼのとして  
書くひとの心の高さ思はしむ秋萩帖の安幾波起の字も

大和なる宇智のみ寺の道風の銘ある鐘はいまもかつ鳴る  
道風が自在の筆のあと見れば玉泉帖は字ごと飛ぶらし  
道風はまことうまびとかしこくも醍醐の帝文字書かせます

清少納言

書きしことなべて身に染む清原の元輔の女の才をたたへむ  
祖父の深養父の歌にしたしまぬこころも君の文にしたしむ  
さびしやと思はば直ちに開くべく枕の草紙傍に置く

紫式部

今日も讀む上東門院に仕へたるいみじきひとの書けるその文  
いにしへの日本のよさや戀ふるらむ谷崎源氏吾妹子も讀む  
道長の榮華はもろく消ぬれども紫式部の名はもほろびず



須磨明石源氏の君のさすらひのさまを思ひて旅せしもわれ  
わが胸に残るはいづれそのなかの夕顔の巻浮舟の巻

僧西行

西行がこの世を棄てしころをば山家集見てすがしみにけり  
はしけやし美福門院のおん舍利をおもふ圓位のそのころはや  
白峰のおん陵にぬかづきてこの歌法師何をかも祈る  
西行が陸奥ゆきの旅姿在りし日のごと見るよしもがな  
如月の十六日の西行の忌はなほ寒し京のはづれは

源實朝

大君に二心あらじとうたひたる實朝を思ふこのごろや切  
承久の春の朝の雪さむくあた刺されし人をおもほゆ

白川の里居わびしみ夜ふかく金槐集の歌讀み耽る  
鎌倉の歌將軍のおもかげを思ひ描けば肥肉にして  
龍王にただちにものを云ひたまふ右府の歌の威およびがたかり  
その命短からずとおもひるぬ家集に残る七百の歌

世阿彌元清

白河の田樂法師おとろへて世阿彌世に出でしころを思はむ  
こころざす方はかはれど吾も往かむ世阿彌が説ける幽玄の道  
足利の世はいまもなほただひとり觀世太夫のために光るや  
今にして世阿彌を思ふ遅しやと吾をたしなめ花傳書を讀む  
藝道の深さに思ひ入るときや世阿彌の息はいまも身近に  
藤若の昔おもへばうらぶれの佐渡の世阿彌は寂しきろかも



## 千利休

世に盛るさかしらの茶は知らねども利休の心いささかは知る  
 茶聖の利休の心まなばむと碗をこそ持て手つきあやふく  
 桃山の城にひとりの利休ゐてなごやかかなりやたたかひの世も  
 利休よりいまにつたはる日本の茶道の深さ思ほゆるかも  
 茶は知らね利休てふ名に親しみて伏庵住居四年になりぬ

## 本阿彌光悦

おほらかに光悦が繪に遊びるし元和の昔おもほゆるかも  
 鷹が峰に光悦ありし世よりなほ美しきことを語り繼ぐがね  
 見ればまづ心や澄まむ鷹が峰といふ銘のある光悦の碗  
 光悦のすぐれし文字の冴えも知る本阿彌切のたふとさも知る

比叡の山遠くながめて光悦が心ゆたかに在りし日おもほゆる

## 野々村宗達

繪は残れその人のことつばらかに世に知られぬもなつかしきかな  
 今日はこちら豊かにあらむ宗達の源氏屏風を胸にゑがきて  
 かくながく残ると知らず樂しげに劉青軒は屏風繪を描く  
 宗達の夢やはこもるうつくしき扇面の繪のひとつひとつに  
 會へば夜を古繪がたりに更かすなり宗達好きの洛北の友

## 松尾芭蕉

夜ごと夜ごと爐の邊にありて蕉風の俳諧道のはてを極めむ  
 今日もわれ爐邊にありて思ふなり芭蕉の句境いよよ深きを  
 旅ゆきてわれに曾良なき寂しさをかこちしことも幾度ぞそも



しみじみと芭蕉をしたふころもて徒然の詞今日も誦し居り  
 術もなく寂しき夜半は起き出でて猿蓑さがす暗き小棚に  
 しめやかに芭蕉を思ひある夜半ぞ比叡山嵐さはな吹きそね

近松門左衛門

淨瑠璃の人みないまの世に生きてわが巢林子なほ死なずけり  
 近松の世話淨瑠璃のめでたさを相見るとに友説きやまず  
 いたはしき讀みつつ泣けば淨瑠璃のなかの人とも思ほえなくに  
 巢林子書けば浪速の極道の死にも涙をさそはれしかな  
 國姓爺合戦讀みて夜も寝ねず韃靼のこと夢みしもわれ  
 近松の心中ものを浪華津の廓風俗とのみ思ふな

井原西鶴

西鶴の艶女住みたるあたりぞと梅津の里をい往きしや何時  
 讀むほどに胸にひびき來いまもなほ老西鶴は生きてあるかな  
 西鶴の書讀みさして空見れば空に文字あり色即是空  
 好色の名にこそ負へれしかはあれ西鶴の書く文字のするどさ  
 西鶴の浮世册子に堪へがたき寂しさおほゆわれも老いしか

池大雅

いまもなほ畫の仙としておほらかに九霞山樵嘯きたまへ  
 大雅堂住みしと思へば京さむき眞葛が原もなつかしきかな  
 貧大雅祇園に繪をば賣りし日の垢染み布子思へばさびしも  
 貧しさに馴れては妻の玉瀾も描き棄て反古の紙衾着る  
 去年の秋見たる大雅の羅漢圖のなかに描かれむ吾としもがな



## 與謝蕪村

いみじくも與謝の蕪村がしたまひし句三昧よな繪三昧よな  
 夜半亭あるじが頭まるめたる姿かしことをろがみまつる  
 淀川の堤の草の離々たるを見つづ蕪村の句境おもはむ  
 母を戀ふる心まざまざあらはれし春風馬堤の曲のいとしさ  
 あなをかし蕪村が或る夜酔ひ描きの杓子踊るといふはまことか  
 句聖の死をなげきつつ臨終のしら梅の句をすがしむわれは

## 本居宣長

宣長の玉銚百首讀むときの心をどりをいまだ忘れず  
 歌はみなもののあはれを本とすと宣長のいふ言よきかなや  
 山櫻ほのかに咲きて本居の大人の朝ともなりにけらずや

宣長の生れし伊勢の松坂をかの日訪ひしも歌のゆかりぞ  
 鈴の屋の鈴はかしこし宣長の心のひびきいまもつたふる

## 小林一茶

俳諧寺一茶の一生寂しやと思ひつつゆきぬ信濃路の旅  
 貧にゐてなほ世を人ののしりぬ侷僂一茶が發句の吐きやう  
 この涙一茶がひとり寂しくも雀と遊ぶ句より來るらし  
 人の世のいたましきことのみ書きし七番日記讀めばかなしも  
 句を讀みて泣かむか世をば怒らむか一茶はまこと寒く生きたり  
 いまもなほ人泣かしむる句をよみし彌太郎佛に何を手向けむ

## 僧良寛

良寛をこよひしみじみ思へりと越の御風に消息をせむ



良寛はおもしろきかな世をわびてみづからとなふ檻樓生涯  
 子供等と鞠つき遊びたはむれし良寛思へばわれも寂しゑ  
 肩瘦せて囊重しとかこつなり市にももの乞ふ良寛あはれ  
 つくづくと良寛の字を見てあれば風のごとしも水のごとしも  
 良寛が書き棄てにせし水飴の看板の字もにくからなくに

## 樋口一葉

一葉の書きし明治の世を思へばゆゑわかなくに眼潤み來  
 淺草の祭この頃いかになど思ひつつ讀むたけくらべかも  
 一葉の在りし日のごと吉原の裏田蛙の鳴くこゑもがな  
 濁り江のお力あはれと思へども過ぎし世なればせんすべもなし  
 目を閉ぢて命みじかき一葉のすがしさおもふ水仙の花

## 寒行



## 洛北雜詠

流離の境涯に、風騷の身を置くこと幾十年、漸く茅廬を比叡山下に結ぶを得てより、何時しか七年の歲月は過ぎぬ。半生の事思へば茫として夢の如く、洛北閑居の日々もまた幻に住するが如し。

## 白川の秋

落魄の歌つくるべく來しならね京に住みてより幾たびの秋如意嶽の山腹にある大の字も幾秋見つつ親しきろかもこのごろはまた憤ることもなし比叡に雷鳴る時もはや過ぎ秋のおもひ堪へえぬ時は朽縁に出でて狹庭の石にももの云ふ

鹽からく蒟蒻を煮てそそくさと夕餉すましぬ秋を寒がり  
芭蕉忌も昨日と過ぎぬ落ちつかぬ今年は寂びをさまで思はず

## 芭蕉を思ふ

庭隅の石にうす日のあたるにも芭蕉の句境おもひ見るべし  
今日もまた奥の細道讀みかへしこれも悲願の旅とおもひぬ  
夜ふかく芭蕉の一生かへりみて枯野の夢の激しさを思ふ  
死にちかき師の姿をば書き残す支考の日記はあはれなるかな  
讀むほどに身ぬち澄み來ぬ猿蓑の深さしづけさ極まりもなく  
滋賀あがた近しと思へど懶われや幻住庵もいまだ訪はざる  
寂び輕み不易流行などいへること思ひぬ今日のひとつ日を  
猿蓑にあるそのひとつの句を思ひ時雨を待てど遂にきたらず  
芭蕉忌の夕餉の膳にまづ置きぬ味噌蒟蒻のわびし一皿



雨か否落葉かあらず芭蕉忌のゆふべしづかに降るものや何  
寂しさに堪へざる夜半はしめやかに野ざらし紀行讀みてかも寝む

## 寒廬貧厨

わが畑に作りし辛菜鹽に浸で刻みて食めば湯漬うましも  
さらさらと雪降り出でし夕餉どき湯漬を食めば箸もさらさら  
われの食む京の湯漬はおもしろし俳諧の味おのづからして  
元義が妹の許にて食みにけむそれにも似るか今日の湯漬は

## 茅廬囑目

六甲の山のふもとの寒櫻ひと枝挿せば爐の邊なごみぬ  
虚子の編みし歳時記見れば冬櫻の匂ひとつありき文字も寒げに  
日めくりの曆もやがて盡きむとす師走の夜半の柱寒がり

小棚なる南蠻壺もやうやくに老いづくわれを見てや憐れむ

## 眠られぬ夜

眠られぬ小夜床さむし肱曲げてひとり命のはてを思はむ  
とも思ひかくも思ひて眠れねば寒柝を聴く幾たびぞそも  
眠られぬ夜の衾の重うしてやがては石とならむとすらむ  
憶良てふ古歌びとのあはれさも時におもはる眠られぬ夜は

## 對石獨語

おもしろき大無石癡の石がたりいまも聴くがに石を楽しむ  
木食の上人刻むほとけよりややおどけたる顔の石かも  
文鎮となすべく欲しと思へども石選みしていまだ拾はず  
さりげなき石とは思へ見るほどに狹庭古庭親しまれつつ



黙しゐることの苦しき夜半に起きて庭の石とももの云ひにけり  
庭のみか心にも霜の降る夜半は石とももの云ひ寝ねずかもあらむ

佐渡の友に

父君をうしなひて佐渡ヶ島にある大賀渡君におくる。

見はるかす鞅鞞の空いや遠き島邊に友は父をなげくや  
ちちのみの父にわかれし友思へばいとど寒けし佐渡の冬荒れ  
荒海のひびきを友とせし一生寂しと云はじたふとしと云はむ  
佐渡ヶ島檀特山の風寒み友合掌のすがたおもほゆ  
日蓮の袈娑書にもまし友の書く佐渡消息にこもるあはれさ  
すさまじき佐渡海鳴にまじれるはけだしや友のなげく聲かも  
いまさらに佐渡の寒さを君が父の死により知ると友につたへよ  
夜に入らば父の聲せむ佐渡の海の遠潮鳴に聴き入りたまへ

鞅の歌

妹の編みし鞅またも破れたり破戒無慙の足をにくまむ  
破鞅つくらふ妹のうしろかげ寒しと思ふわびずみにして  
うつそみの耻多き身にふさひたる破鞅ぞつくるはで置け  
乏しさに耐へよと教へたまふゆる破鞅もかしこみて穿く  
良寛の破れ衣にも似たるべしわが鞅や繼ぎ接ぎにして

嚏の歌

嚏りてふとおもひ出ぬいつの日か乾漆拂を撫でし寒さを  
よき歌を詠まむと心きほひしもすでに昨日かただに嚏る  
歳時記にふと見出でたる嚏りといふ字もすでに寂しきものを  
しづかなる夜ごろとなりぬ老いさびて嚏ることもやうやくに繁



七年ななとせの京のわび居のそのはての噓りびとをあはれみたまへ  
 慷慨かうがいの言葉あへなくくづほれてただいたづらに噓はなひるあはれ

似非もの

あなけうと猿さるにかも似る顔をして世の似非えせものはさかしらを云ふ  
 似非えせものの世にあり顔がほを見てありぬ時に寂しく時にきびしく  
 まこと世を憂ふるゆゑに似非ものを憎むと云へば友もうべなふ  
 似非ものを敢てにくむにあらねども顔おのづから反そむけられつつ  
 似非えせ笑わらひそれはなほよしさかしらの似非えせ慷慨かうがいは寒きものかも

續洛北雜詠

いまだ老殘の身にもあらぬを、幽居落莫として時を  
 過せば、風霜を感ずること更に深く、凜烈の氣おの

づから骨に徹せむとす。かくてわが廬は陋なりと雖、

暮天に石を喝する時、また一個の獅子窟たらむ。

新春雜感

ゆたかなる心を持ちて年祝としほぎぬわび居の爐邊ろべや貧しけれども  
 比叡ひゑ風かぜ聽ききつつ酌しやくめばわびずみの年祝としほぎ酒の冷たきもよし  
 新年しんねんの爐邊ろべ貧ひんしけど古布ふるのこ子こ膝ひざの寒さはかこたずもがな  
 今年よりしづけき老おのに入らむとすかそけく燃えよ夜よるの爐の火も

倚松庵主人に寄す

「攝陽隨筆」中にある「半袖ものがたり」を讀みて  
 詠める。

われもまたしづかに老おのを樂しまむ土佐の黄平きうへいを半袖はんそでにして



老いぬれば羅漢圖中らかんずちゅうにあるごとき友の姿も見まく欲しけれ  
 肱ひじをかぎり膝ひざをかぎりの夏ごろも着ておほらかにわが友やある  
 とりどりに世をわびつつもこもるらし友の夏安居なげあんこわれの夏安居  
 わが友も土佐の黄平きへいの半袖の身になづむほど老いにけむかも

古帽子の歌

古帽子ふるぼうしかぶりて道をゆくわれや幾起伏いくおきふのはてとおもはむ  
 世の塵にまみれしことは相似たり憐れみて着る古帽子かも  
 比叡風吹けばあなやとばかり飛ぶこの古帽子鷓鴣しやこのたくひか  
 わび住みに幾年経れば何よりも古帽子こそ親しかりけれ  
 倚松庵いしやうあんあるじごのみの鳥打の帽子も古りてせんすべもなし  
 古帽子撫でつつおもふこの埃時ほこりときにはわれを泣かしむるもの  
 すさまじきことを思ひてある夜半は帽子もいつか蝙蝠かばりとなる

蟾蜍に與ふ

空を睨め世におもねらぬ蟾蜍たぐくの面おもしろとしたしみにけり  
 蟾蜍の住み處となりしわが庭は秋まだ來ぬに荒れにけるかも  
 庭隅にすみゆたんなたりやと匍はひ出でて空見る蟾蜍たぐくよ雨な呼びそね  
 蟾蜍の羅漢顔らかんがほこそをかしけれやがては雲を吐かむずけはひ  
 什麼生なまとももの問ひたげに石にゐて半跏を組める蟾蜍たぐく和尚しやうかも  
 われとわが嘲ける思ひ湧くときは夕庭の蟾蜍たぐくを見てもさびしも  
 世を人をあざけり顔の蟾蜍たぐくは増長さうじやう天の足に踏ませむ  
 世はきびし然しかはあれども石の上の蟾蜍たぐく見れば楽しくもあるか

誰か思はむ

うつし世の姿思へばわが眉もおのづ顫ふと誰か思はむ



疾癖やくびきの癡こりはともあれ胸の癡こりいまだ解とけずと誰か思はむ  
 朝あごとの園かはやにありて思ふことかくも寂さびしと誰かおもはむ  
 腹はらゆすりゑらぎ笑わらへど夜よふかく下した泣なすと誰か思はむ  
 眠ねられぬままにいつしかつき初はじめし尿し起お癖びきと誰か思はむ  
 しづかなる夜を風なきに花はな馬ま醉し木びひそかに散ると誰か思はむ

洛北秋風吟

胸むねぬちにあふるる怒いかりりひた堪たへてあぐら居ゐさむく秋風を聴く  
 遊あそ俠けのともがらいかに秋風にいまもその骨ほね鳴るにあらずや  
 誰たれ彼の似え非せ慷か慨がいも聴ききあきてひとりさびしく秋風に立つ  
 きびしさのはてを極まめむ願ねがひ持ちわれ秋かぜの朽く縁えんに居り  
 わが友の鬪とら牛ぎゅうの圖づを思ひ出でて心ぞきほふ秋風吹けば  
 秋風のなかに切は齒がみしあらむよりむしる羅ら漢かんとなりぬべきかな

生なま死しのことを思へば秋風もとみにわが身に親おしまれつつ  
 秋風の吹きゆくはてのきびしさは眦まなぢり上げて見るべかりけり  
 秋の風身に染しむほどに吾わが妹も子こは破やれ冬ふゆごろも縫ぬひいそぎする  
 われもまた秋風びととなりけり京のわび居ゐもすでに七なな年とし

爐邊獨語

爐邊に趺坐して沈思することも、いつしかわが日々  
 の習なひとなりぬ。朝には懷舊の情に心を傷め、夕に  
 は翹望の念に胸を躍うらすれども、いづれも唯徒らに  
 眼前を過ぐる影に過ぎず、遂にまた捉とへ難がたきぞ是非  
 なき。

爐邊小吟



みすずかる信濃の獺子鳥焼きにけり夜の爐邊に旅を思ひつつ  
 芋粥に眼鏡曇らせあることも師走の爐邊の或る朝のわれ  
 世に出でむ否いな世をば遁れなむかく惑ひつつ爐邊になづさふ  
 薄粥をすするもよしやしづかなる老に入らむとおもふ爐の邊に  
 世のさまを思へば臉も重からね爐の火盡くれば肱曲げて寝る

## 芋粥の歌

ありがたく芋粥すすり背くぐみの漢爺となりて爐に居る  
 粥すすり耐へてあるべしかく云へば椀のなかなる芋もうべなふ  
 芋粥の鍋沸々とたぎるのみすがしきかなや朝の厨は  
 臨濟の居士顔はすれ朝ごとのわが家の粥座芋あるは什麼生  
 芋粥をすすりてあればいつとなく土をろがまむ心起りぬ  
 兀然としてわれありぬこの椀のなかの芋ともなるこちして

飲食の偈を唱へつつ芋粥をすすりてあればわが世樂しも  
 この粥をすすりてあればこころ足る芋和尚ともならばなるべく  
 吾妹子がつくる芋粥熱うして情の深さ思ほゆるかも  
 冬の來て陽氷る夜はいとどうましと思ふ芋粥の味

## 凡人凡日

うす日射す京のわび居の破障子見つつ歌など思ひてあらまし  
 古疊つめたき部屋にひとりゐて鹽噌のことも時におもへり  
 定に入るごときこちに今日はぬ爐端羅漢と見なば見たまへ  
 つつましく胡麻鹽かけて飯を食むこのしづかなる夕ごころかも  
 世のさまを思へば心も安からず李白の詩さへ讀まで久しき  
 日蓮をたのみて一生經たまひし叔父の法師の思はるるかな



## 衣に寄す

萬葉集の譬喩歌の中に「衣に寄す」と題する歌あり。  
われにもその歌なからでやは。

爐邊にゐて妹と語れど珠衣のさるさる沈むころなるかも  
吾を見ても妹袖振らずよしさらば詰むるもよしや妹が長袖  
わび住みの燈火暗く古妹は袖詰むるべく針をこそ持て  
もの思へば心うつらに古衣の肩の紕も寒しとおもはず  
わびぬれば橡染めの衣を着て爐の邊に寒くありぬべきかな  
かたくなの心を持てば人よりも爐に親しみて穢れごろも着る

## 續爐邊小吟

毘首翺磨如來を刻むころもて歌は爐の邊に思ふべきかな

元義の歌を思ひぬ爐の邊には吉備山風吹くにあらなくに  
白川の石の匠を家主として六年経ぬ古りし爐の邊に  
いまもなほ妹を思へる元義の歌くちずさみ爐邊にこもらふ  
比叡風の音はたと絶え爐の灰もたちまち氷るすさまじの夜や

## 市井夜講

爐邊にありて往時の市井風流をおもふ。

夜深く昔おもへばなつかしき寄席の囃子も聴こえ來るがに  
寄席がたりいしくもしたる淺草の龍雨世になく寂しきろかも  
ありし日の市井夜講のおもひでもいまはかそけし夢かとばかりに  
京に來てわび住みすれど蠡斯夜鳴く聴けば紫朝おもほゆ  
ひそやかに鳴く蟲の音や目閉づれば高座のひとの遠きおもかげ  
看板の勘亭流のふと文字の典山の名やいまもわが目に



夏ながら輻ぬち寒く寝がへりぬ小夜衣草紙思ひ出でつつ  
浪速津の圓馬あはれとおもひつつ青唐辛子酒なしに食む  
忘れしにあらねまた見ぬ抽斗の馬樂の寫眞古りにけらしも  
かかるとき人の心をむぎと刺す盲目小せんのひとつ言もがな

## 夜深く

夜ふかく壁にうつれる己が影を見つめてありぬ心きびしく  
夜ふかく思ひ出でては口ずさむ師の鐵幹の慷慨の歌  
夜ふかくわび居の寒爐まへにしても思ひ居れば蜘蛛ひとつ來ぬ  
夜ふかく厠に立ちてひとり聽く狹庭の隅の蟾蜍のこゑ  
夜ふかく鬚の剃杭撫でつつも世のきびしさをよしとこそ思へ  
夜ふかく嚴しきことを思ふときやわれの膝には蠅も馴寄らず  
夜ふかく思ひもかけずにはひ來る昨日の酒の香だにくまむ

夜ふかくわれの怒りも極まればこの身このまま石となるらし

## 木綿讚

柳田國男氏の「木綿以前の事」を讀めば、そぞろに  
日本の風俗の美も思はれてなつかし。

柳田の大人がいみじき文字のあと辿りてゆけば木綿親しも  
俳諧の附句の味のおもしろさ古き木綿の手觸りに似る  
わが歌も木綿裕の鼠いろよりも寂しくあれとおもひぬ  
いそのかみ古りし木綿の紺のいろうれしと思ひと見かう見する  
親しめば離れがたなき思ひする手織木綿に似るひとがな  
黒木綿古びし見ればいまはなき愚庵和尚の思はるるかな

## 玄冬居愚草



昭和十九年九月、われは茅廬を北白川より岡崎へ移しぬ。偶上梓したる歌集に因みて玄冬居と名づけたれども、宿縁薄くして住むこと五月、遽かに遠く北陸に向つて去れり。その間の吟詠乏しきもうべや。

### 木賊の庭

わが庭の木賊に<sup>とくさ</sup>いまだ霜降らず<sup>かた</sup>樂しきかもよ朝の<sup>かた</sup>圃も  
あはれなる寒生<sup>かんじやうがい</sup>涯と云はば云へ木賊の庭にこころ足らへり  
秋さむき庭の木賊の<sup>むらおひ</sup>群生は愚庵和尚の<sup>あまひ</sup>荒髯のごと  
移り<sup>うつ</sup>来て木賊の庭のわびしさに今朝も寒けく<sup>はなひ</sup>嚏りにけり

### 立山遠望

昭和十九年十月、招かれて越中の國に遊び、遠く立

山を雲中に望みて詠みける歌。  
雲の中に隠れてもなほ迫り来る立山の持つ大き嚴しさ  
われ來ぬとおほけなけれど立山の雄山の神にもものも申さむ  
立山の<sup>おほなほ</sup>大高原の<sup>みだ</sup>彌陀が原かしことしめす指をかしこむ  
來む夏は大立山の山精進われはもせまし心すがしく  
のぼらむと思へどせんなし立山の山閉祭すでに過ぎたり  
わが思ひいつかたなはる雲となり立山の上のあたりさまよふ  
またも訪ふよすがに問はむ山荒れて立山おろし吹くは何時ごろ

### 法輪寺古瓦

斑鳩の里の慶覺法師、雷火に焼けたる古瓦を齎らし  
來る。

遠き代の古りし瓦の蓮華文見つつかなしむ塔の焼けしを



ありがたき飛鳥瓦の文様の蓮華の葢も焼けにけらしな  
瓦さへ塔の焼けしを歎くめり置けば机もいつかしめりぬ  
あたらしき瓦勸進われもせむ文字賣る錢や乏しけれども

### 鑑賞餘響

日本古典の美の眞髓は、藝術の上にもありとこそ  
思へば、能樂も繪畫も演劇も、唯おろそかには見る  
可からず。わが鹽識は未だしけれども、胸裡に残れ  
る強き印象は、やはか須臾にして消ゆべきかは。

### 文樂の印象

文樂座の人形淨瑠璃は、日本至寶の藝術として親し  
み深し。即ちその印象を詠みける歌。

文樂のかへり路の酒を寒がりしむかし浪華の旅もおもはむ  
旅といへばむかし御靈の文樂の遠おもひでもえこそ忘れね  
古靱の肩衣かすか揺れにけり人間の苦をいしく語れば  
景清はいまなほそこにあるごとし切なるかなや古靱の聲  
撥につれていとおもしろく人形の寄り眼陀羅助動くならずや  
たまきはる命を持たぬ人形も文五郎の手にあれば泣かるる  
口觸れてしづかに湯呑置くときの太夫の額の白毫の澄み  
寶曆の昔を戀ふるころもて竹豊故事に親しみしかな  
文樂の首のことを書きし文讀みし昨日のたそがれの雪

### 鉢の木

東本願寺の白砂舞臺にて金剛巖氏所演。

風さむし舞臺のまへの白砂も佐野のわたりの雪とおもはむ



さながらに雪降るさまを思はしむ最明寺殿の笠の持ちやう  
能を見て不覺の涙落しけり鉢の木を燃す人のなさけに  
見るほどに眼いつしかうるみ來ぬ金剛巖の藝のいみじさ  
瘦馬に鞭打つさまを見するとき橋がかりさへ寒かりしかな

弱法師

京都大江能樂堂にて櫻間金太郎氏所演。

己が影に似るとおもひて親しみぬ舞臺のうへの弱法師の影  
磨かれし舞臺の板にうつりたる足袋の白さやいまもわが目に  
寂然とただ坐りゐても思ふ俊徳丸はあはれなるかも  
かすかなる杖のふるへを見てあれば枯蘆の葉に風吹くごとし  
投げ棄てし杖を手探る指さきもなほ語るなり深きかなしみ  
あはれとぞ思ふこころも極まりぬ盲法師のまろぶ姿に

雨月

京都観世能樂堂にて梅若萬三郎氏所演。

橋がかり出で來し僧は西行か笠の寂しさ忘れなくに  
神さびし老びとありて秋ふかき舞臺もいつか住の江となる  
うつらうつら歌問答に聴き恍れぬ秋のさむさもいつか忘れて  
舞臺より落葉の音も聴こえ來てまさに極まる幽玄かこれ  
いにしへの世阿彌にかよふ幽かなるこころも見たり今日の雨月に  
おのづから萬三郎のたましひの奥處に觸れてうつらありけむ  
紗尉の面に翁鳥帽子せるひとゐて舞臺いよよもの寂ぶ  
旅びとよともにい寝むといふ言葉深くも胸を打つは何ゆゑ

洛中洛外圖



京都博物館に筆者不詳の「洛中洛外圖」を觀て、その  
頃の都風俗に心惹かれ、われとしもなく詠みける歌。

この繪見て元祿の世を戀しまずただに笑むほど老いさびにけり  
祭見に洛中こぞる人の數つばらに描けるこの繪よく見む  
馬に乗る青公卿ばらの桃尻も筆かろがろと描けばおもしろ  
この屏風描きびと知らず繪を見れど屋並霞めば町の名知らず  
秋なればこの繪のなかの知恩院の僧のひとりも嚏るかあはれ  
繪のいのちこぞとばかり祇園會の月鉾をまづ描きにけらしも  
大津道をいそぐ奴の空隰は繪とはおもへど寒かりしかな

### 北陸雪中吟

昭和二十年二月、丈餘の積雪を冒して北陸に來り、

越中八尾の羈客となる。雪深くして往くに惱むと雖、  
人生の行路の艱難に比すれば、猶險しとは云ふべか  
らず。暫くここに籠居して、靜かに國の前途を思は  
む。

### 流離行

昭和二十年二月、加賀路を過ぎて越中に入れば、雪  
いよいよ深くして、流離の感もそれとともに深し。

玻璃窓の曇りわびしく拭きにけり旅ごころもて雪を見るべく  
耳につく高志の訛りの濁み聲もやうやく馴れて雪は深しも  
目にさむしいづこの驛か鱒下げて入り來しひとの雪沓の雪  
大雪となりし高志路のしづけさは深々として切なかりけれ



## 八尾口占

放庵のえらびし八尾八景のなかにあるべきわが身ともがな  
 酒にがくなりたる老やみづからの骷體とおもひて杯は取れ  
 さすらひの身を置くところ雪國の八尾の酒は冷たかりけり  
 おわら節目閉ぢてうたふ人の顔耳鳥齋似と思ひさびしむ

## 紙匠の家

卯の花村の紙匠谷井氏の家を訪ひて詠める。

楮の香黄蜀葵の香とまじり紙漉きどころ山を戀はしむ  
 おほかたは寂しき歌ぞわがために黄朽葉いろの紙を漉かずや  
 紙だくみ君がつくるは寂びふかし利休の家の壁紙かこれ  
 いつしんに竹簀うごかす紙漉女見つつし居れども云はずけり

屏風には志功版書の諸天ゐて紙漉く家の爐火はなつかし  
 越路なる卯の花村の紙匠吾をもてなすと煮る酒ぞこれ

## 爐端の歌

紙匠紙はかたらず爐の端に今朝撃ちしとふ山鳥を焼く  
 あしびきの山鳥焼きて山好きの放庵おもふ爐の端の酒  
 おわら節うつら聴きつつ酒酌めば芋田樂もうまかりしかな  
 おのが身の幾起伏を思ふならね目をしばたたく爐火のいぶりに  
 爐のうへの自在なつかし大土佐の山の古庵いまも戀ふれば

## 越の旅籠屋

旅籠屋の古看板に吹雪して飛驒街道をゆくひともし  
 越に来て旅寝をすればあかつきの早起癖も寒かりしかな



おもしろし旅籠の膳の焼鳥賊の世の辛酸に似たるからさも  
しづかなる越の旅籠の午さがり雪下しびとか屋根を歩むは  
ほの白く障子にうつる雪明り見つつしわれと泣かまほしけれ

雪沓の歌

うつり来てはやくも七日われすでに越人めきし雪沓を穿く  
雪沓を穿けばたちまちさすらひの寂しきに觸れ老を思はず  
家ごとに濡雪沓を乾してある雪晴れの朝の町のしづけさ

雪中籠居

如月の越の旅籠の古炬燵雪にこもりてあらむわが身か  
さらさらと煤け障子に音は立つれ心に觸る雪ならなくに  
雪の日の旅籠炬燵に面伏せてむかし思へば臍も寒かり

わが友の能登のみやげの海鼠腸の竹筒青き雪ごもりかな

僧房にて

八尾の町にある常松寺の僧房を借りて、沙門ならぬ  
にかりそめのわれが栖とせむとす。

かにかくにわび居は楽しものを書く机代りに古靴置く  
かくあるは何和尚ぞとある夜はみずから擲擲す寂しきままに  
八尾紙高志消息を書くよりもみづからの偈を書きてあらまし  
拂子めく拂塵を妹も取るものか越わびずみの朝ゆふべに  
夜はむかし佐渡路に見たる日蓮の袈裟書單衣書おもひ籠らふ  
あかつきを驚き覺めて手探れど枕のほかにもなき  
涅槃會も近しといふに風さむくなほ丈餘ある窓の外の雪  
落の臺なほ萌えずとよ窓の外は立山嵐さむざむと吹き



## 御巡幸を畏みて

三越路にさすらふわれや大君のおん長靴の御姿に泣く  
 深川の八幡宮の大楠の焼葉な降りそ大君の上に  
 汐見橋小名木川橋常の日は行幸まします橋ならなくに  
 大君の踏ませたまへる焼土を日本の土と臣等知れりや

## 解 説

吉 井 勇

自分で解説を書くに當つて、先づ私の考へたのは、五十數年に互る私の歌歴を語つて、それ  
 以て歌集のこの解説に代へたいといふ事である。これは私が身を以て語るものであるから、これ以  
 上の解説はないと信ずる。

遙かに遠い思ひ出ではあるが、私の歌に對する記憶は、まだ七八歳の時分に父から聞かされた、  
 思ひきや彌彦の山を右手に見て立ちかへる日のありぬべしとは

といふ、私の祖父の歌から始まる。父はその時分祖父の話をすると、やや感傷的な顔付をしなが  
 ら、薩摩琵琶でも吟ずるやうな調子で、いつもこの歌を朗詠して聞かせて呉れたが、これは明治  
 維新の際、西園寺公望を征討總督として越後方面に向つた軍旅の中に、參謀として加つてゐた私  
 の祖父が、戦亂が鎮まつてからの歸途、遙かに彌彦山を遠望して詠んだ歌なのである。私の歌の  
 最初の記憶がこの歌であつて、それに依つて歌に對する愛着の念を持つやうになつたとすれば、  
 私の祖父は私に取つて或る意味での歌の師と云つてもいいであらう。

それは一片の思ひ出として、私が最初歌を作つたのは、まだ東京芝の高輪に住んでゐた明治三



十年代の事であつて、先づ始めに自分の詠草に批を乞ふたのは、その頃私の父が會長をしてゐた關係から、水難救濟會といふ慈善團體の幹事をしてゐた竹柏園の歌人石榑千亦氏であつた。この水難救濟會は、不思議に歌人とは因縁が深く、石榑氏はその會の創始者として、死に到るまでそこに職を奉じてゐたし、古くは根岸派の森田義郎、後になつてからはアララギの古泉千楳、竹柏園の新井洗などは、みんなこの會の事務室に机を並べてゐたのである。さういふわけでここには、私の十二三歳の時分には、もう既に石榑千亦氏を中心とする水曜會といふ歌の會があつて、私はそれに出席はしなかつたが、詠草だけは歌會の度毎に出してゐた。その頃私がどんな歌を作つてゐたか、今では全然覚えてゐないけれども、海に關する作品の多かつた事だけは、石榑氏が朱筆を加へた後の評言の中に、さう云つた文句があつた事が、今猶私の腦裡におぼろげながら残つてゐるので分るのである。

私の記憶にある最初の歌は、それから一二年の後、東京府立第一中學校に入つてから作つたもので、たしか西郷南洲傳を書いた維新史の研究家勝田孫彌氏の泰東塾といふところに、寄寓してゐた時代だと思ふから、多分二年級になつてからの事であらう。勝田氏はその頃「海國少年」といふ雑誌を發刊してゐたので、私は不圖勧められるままに、その短歌欄に投稿したところ、意外にもそれが天位に選ばれたのであつて、それは、

出雲なる籬の川上はそのむかし八頭の大蛇住みけるところ

といふ、いくらか萬葉調を帯びた歌なのであつた。選者は後に川柳に轉じたが、當時は根岸派の

一人として歌を作つてゐた坂井久良岐氏で、この一首に依つて私が歌人となるべき運命が定まつたと云つてもいい。

しかし私が本格的に歌に精進しようと思つたのは、東京府立第一中學校から攻玉舎中學に轉じ、そこを卒業してからの後の事であつて、肋膜炎を病んで鎌倉に轉地療養中、その當時最新味のある詩歌文藝雜誌として、一世を風靡してゐた「明星」の歌風に傾倒した結果、この雜誌を出してゐる與謝野寛先生主宰の新詩社に入社しようと思つた。それで私は入社したいといふ希望の手紙を出すと、早速與謝野先生から返事が來て、それには今でもはつきりと私の腦裡に刻まれて忘れる事の出來ない、「歌は禪の如きものに御座候」といふ、極めて力強い一句が書かれてあつた。その時はこの禪家の一喝に似た言葉の意味が、まだはつきり分らなかつたけれども、その後漸く歌道の深奥に到達する事が、如何に難いかといふ事を知るに及んで、豁然として思ひ當つたのは、「歌は教ふべきものでなく、自ら研鑽して悟入すべきである」といふ事が、曩に與謝野先生が私に與へられたあの一句の眞意であるといふ事であつた。爾來私は五十年に近い歌作生活をつづけてゐるが、常にこの鏘々として音を發するが如き一句だけは、恰も直目の一棒のやうに私の胸を打つて止まないものである。

新詩社に入社してからは、私の歌に對する熱情は、殆んど爆發するやうな勢ひで高騰して往つたが、それから間もなく私の歌にも、ひとつの大きな轉機が來た。それは明治四十年の七月から八月へかけて、與謝野寛先生に率ゐられて、北原白秋、木下杢太郎、平野萬里等と九州へ旅行を



した事であつて、「日本耽美派の誕生」の著者野田宇太郎君がその著書の中で、「わが國の文學の封建性を破り、自由主義的ヨオロッパ文學を移入する運動の特色をなす異國情調は、右の文章でも明らかであるやうに、明治四十年の夏に行はれた『明星』新詩社の九州旅行から始まつたと云ふことが出来る」と云つてゐるのを見ても、その時の九州旅行が如何に文學史の上から云つて意義のあるものだつたかが分るであらう。

この新詩社の九州旅行は、同行の五人の者が交互に一回づつ分擔して、「五足の靴」と題する紀行文的な旅信を書き、それを東京二六新聞に連載したものが、近年になつて發見されたから、それに依つて私達の行程を辿つて見ると、東京を出發したのは明治四十年七月廿八日で、九州での第一歩を博多に印して以來、柳河、佐賀、唐津、佐世保、平戸、長崎、天草、島原、熊本、阿蘇等を遍歴、八月の末に東京へ歸つてゐる。この旅行は要するに切支丹遺跡探訪と云つたやうなもので、これに依つて最文學的影響を受けたものは、北原白秋と木下杢太郎の二人であつて、白秋の詩集「邪宗門」や杢太郎の戯曲「南蠻寺門前」などは、わが國南蠻文學の先蹤をなすものと云つてもいいであらう。私は作品の上で、この二人程著しい變化を示さなかつたけれども、思想的にも藝術的にもこの旅行が、ひとつの大きな轉機となつた事は否めない。

さういつた轉機は、行動の上にも現はれて、かうした異國情調の影響に依つて、自由主義的な思想に目覺めた私達同志の者、即ち北原白秋、木下杢太郎、長田秀雄等は、「明星」以外に作品を發表する事を許さなかつた、新詩社の封建性に飽き足らなくなつて、遂にその翌年の明治四十

一年の一月、袂を連ねてこの結社から脱退をした。

雑誌「昂」が創刊されたのは、明治四十二年一月であつて、森鷗外先生監修の下に、石川啄木、平野萬里、それに私の三人が、交互に編輯を擔當した。これには前年十一月に第百號を出して廢刊した「明星」の同人達も加はつてゐたが、この雑誌は詩歌中心といふよりも、むしろ戯曲や小説を發表する事に依つて、廣く文壇の注目を惹いた。創刊號には鷗外先生の「ブルムウラ」第二號には木下杢太郎の「南蠻寺門前」第三號には私の「午後三時」といつたやうに、毎號戯曲の創作が載せられてゐたが、鷗外先生はその後も毎月小説や戯曲を發表された上、海外の目星しい消息を抄録した「椋鳥通信」を連載されて、これも呼び物のひとつとなつた。

私の第一歌集「酒ほがひ」が世に出たのは、明治四十三年九月であつて、卷頭に木下杢太郎の繪が一葉挿入されてあつたが、これは南蠻船の來船を大勢の日本人が、抱擁したり踊躍したりして歓迎してゐる圖柄であつて、船の帆には朱で BACCHUS ET VENUS と記されてあつた。以て先年の九州旅行で得た異國情調の餘韻が、猶この歌集にまで及んでゐるといふ事が分るであらう。

齋藤茂吉君は私の歌風を、「純情(戀愛の情緒)をば、きはめて單純な句法で仕立ててゆく手法で、その調べは常に直線的であるから、一讀して共鳴するものは共鳴してしまふ特質を持つてゐる。また感情には迂路を取らぬ直截性を持つて居り、調べの直線的な特質と相俟つて、讀者の胸を響かせる一つの力を持つてゐる」と云つてゐるが、この言葉は私の第一歌集「酒ほがひ」に、



最よく當て嵌まるものであつて、それこそ極めて直截的に私の歌風を道破してゐる。この明治四十三年といふ年は、期せずして私と同年輩位の各流派の歌人が、記念すべき歌集を世に出した年であつて、若山牧水の「別離」前田夕暮の「收穫」石川啄木の「一握の砂」土岐哀果（善磨）の「NAKIWARAI」等は、みんな殆んど同時に出版されてゐるのである。

觀潮樓歌會が森鷗外先生の主唱に依つて始められたのは、明治四十年三月からの事であつて、毎月第一土曜日を會の日と定めて、明治四十二年の夏頃までつづいた。この歌會に就ては、鷗外先生がその詩歌集「沙羅の木」の序文の中で、「其頃雜誌アララギと明星とが、參商の如くに相隔つてゐるのを見て、私は二つのものを接近せしめようと思つて、雙方を代表すべき作者を觀潮樓に請待した」と書いてゐる通り、この歌會は鷗外先生が、國語問題その他に於ても、常に抱いて居られた折衷主義の試みのひとつであつて、この序文の外猶二三書かれたものがあつて明らかである。請待されたものは根岸短歌會即ちアララギ系統からは、伊藤左千夫、長塚節、古泉千櫻、齋藤茂吉、平福百穂、新詩社即ち明星系統からは、與謝野寛、北原白秋、石川啄木、木下杢太郎、平野萬里、竹柏園即ち心の花系統からは、佐々木信綱、石樽千亦などであつたが、その外上田敏服部躬治、賀古鶴所、石井柏亭なども時々出席、私も新詩社の一人として加はつてゐた。しかし鷗外先生が企圖せられた、渾然たる新抒情詩の一體を作り上げるといふ事は、結局理想に終つてしまつたけれども、各流派の歌人達を、接近融和せしめた功績は大きく、齋藤茂吉君と私との今日に到るまでの交遊は、この會に依つて始められたと云つてもいい。

明治四十四年六月、小山内薫、市川左團次の兩氏に依つて創立された自由劇場の試演に、私の書いた「河内屋與兵衛」が上演されて以來、私はその創作力を専ら戯曲の方に注いでゐたために、歌業の方は大分懈怠が甚しかつたが、それでも大正二年六月には歌集「昨日まで」を、大正三年十月には歌物語集「水莊記」を、更にまた大正四年には「片戀」「祇園歌集」大正五年には「黒髮集」「未練」「東京紅燈集」大正六年には「吉井勇集」「祇園双紙」大正七年には「毒うつぎ」「鸚鵡石」大正八年には「旅情」と云つたやうに、歌集も次ぎ次ぎに出す事が出来た。しかし今から回顧して見るとこの時代が、歌人としての私に取つて、最大な危機だつたやうな氣がする。それはその頃の作品を見ると、一讀了知する事が出来る事であつて、かういつた思想的にも藝術的にも不安定な期間は、昭和五年に相模野の林間に閑居、虚無に徹する事に依つて得た第二の轉機が来るまでつづいた。

私は昭和九年九月、歌集「人間經」を京都の政經書院から出版したが、これに収録せられてゐる作品は、昭和五年四月に上梓した「鸚鵡杯」以後のものであつて、私自身ではこの歌集「人間經」を、第一歌集の「酒ほがひ」に次いで意義のあるものだと思つてゐる。この歌集には巻頭に、「吉井勇に寄す」と題する佐藤春夫君の詩を載せてゐるが、それには、

若き命をうたひては

若きわれらをよるこばせ

今また老の近き日に



歌聲頓に變りたる

君が歌こそいみじけれ  
われまた老の近き身に

といふ一節があつて、私の歌風の變化した事は、この詩を讀んだだけでも分ると思ふ。

その間私は昭和六年六月から、自ら主宰する詩歌文藝雜誌「相聞」を創刊、後に「昂」と改題して刊行をつづけたが、如何も私にはかういつた結社を作つて、後進を掖導してゆくといふやうな事は、性格的にも適してゐなかつたと思はれると同時に、最初與謝野先生の門に入つた時に貰つた手紙の中に書いてあつた、「歌は禪の如きものに御座候」といふ一句が、何時までも腦裡を去らなかつたので、二年程後に思ひ切つて結社を解散、雜誌も同時に廢刊してしまつた。しかしその間前にも云つたやうな一轉機を劃する事が出来たのは、さういつた自ら主宰する雜誌を持ち、如何しても歌道に精進をしなければならなかつた結果なのであらう。

私が相模野の閑居を去つて、土佐の山峽に隱棲するやうになつたのは、昭和八年八月四國に旅行をした時、そこを訪れてからの事であつて、流離衰殘の身を置いたところは、土佐でもあまり人に知られてゐない、もう阿波との國境に近い、菲生の山峽にある猪野々といふ部落だつた。私はここで最初のうちは、物部川の斷崖の上に建てられた、小さな鑛泉宿で暮らしてゐたが、後にはそこに溪鬼莊と名付くる小さな草庵を構へて、そのの爐邊で二三年過した。さうなるまでの徑路は私に、「溪鬼莊を思ふ」といふ一文があるから、その一節を引いて見よう。

「私はこの時この鑛泉宿に、川の兩岸の曼珠沙華が眞つ赤になる頃まで、一月あまり滞在してゐたが、その間にはこの山里の人達とも、すつかり親しくなつてしまひ、到頭その翌年再びこの山峽を訪れた時には、高知の友人の取り壊すといふ家を譲り受けて、直ぐこの鑛泉宿の下の崖つ縁のところ、いとまささやかな草庵を建てて、爐端の酒を楽しみに、その日その日を送るやうな佗住みの身となつてしまつた。

それからここに住んでゐた數年の間、私はその歲月の半ば以上を、多くは旅でばかり過してゐたので、この草廬に落ちついてゐた時は、日數にすれば一年にも足りない位かも知れなかつたけれども、長い旅から歸つて來て、歌行脚に疲れた體をこの爐邊に横たへた時位、わが身の安けさを覺えたことはなかつたのだつた。」

歌集「天彦」は、私が土佐を去つて京都に移つてから後、昭和十四年十月に出版されたものであるが、その巻頭に收めた「寂しければ」と題する連作は、この溪鬼莊籠居時代に作つたもので、これに依つてその當時の生活や心境を知つて頂ける事が出来ると思ふ。

私は昭和十二年十月には、或る機縁からこの山峽の草庵を棄てて、高知の市中に出て來たが、鏡川の河畔に在つた古びた家で過した、形影相憐とも云ふべき、一年ばかりのしづかに落ちついた歲月は、それまでの私の忙しかつた人生流離の旅の塵を拂ひ落すのに、どの位役立つたか知れなかつた。障子を開けると川を隔てた向ふには、筆山や鷲尾山のなだらかな山容が見え、庭には石榴、柿、梅、芙蓉、南天、蘇鐵などが茂つてゐて、夏の日盛りには、幾匹もの蜥蜴が不氣味な



青い背を見せて遊んでゐた。

私が土佐から京の洛北北白川の里へ居を移したのは、昭和十三年の十月、秋もやや深くなつてからの事であつた。そこは百萬遍よりは東北にあたる、近江路へ出る山中越の街道筋を、ちよつと北へ入つたところであつて、愛宕山の方へ落ちる日が眞ともに照り付ける二階建の借家だつたが、そこで私は昭和十八年の十月まで五年間を過した。私はこれまで遊びに来た事は度々あつたが、かうして京都の一隅に、假初の佗住居ながら居を構へるといふ事は、生れて始めての事だつたので、何から何まで新しくなつた心境だつた。ここに住んでゐる間に私は、「天彦」「遠天」「風雪」「朝影」「玄冬」等、いくつかの歌集を出したが、それは全部その當時若くはその以前の生活記録であつて、東洋的な私の藝術精神は、ここに來てから周囲の環境もあつて、だんだん閑寂幽玄の境地へ向つて進んで往つた。

昭和十八年十月には、北白川から更に岡崎圓勝寺町に移つたが、翌十九年二月には、戦災が漸く身邊に及ばうとするのを感じて、急遽富山縣婦負郡八尾町に疎開をしたから、そこに住む事は僅かに五ヶ月、従つてここで得た吟咏は、歌集「寒行」の中に五六十首あるのみである。三好達治君はその隨筆集「卓上の花」の中でこの「寒行」を品評して、「吉井さんの歌の本來が、純自然觀賞の方へはいつかうに向はうとせず、反對に専ら人事世事(その一支脈としての懷古趣味)爐邊雜事の方へ、その方向は多方面だが、一言でいつて人間世界の方へ向はうとする傾向の著しいのが、これはもう誰の眼にもはつきりと看取されるであらう」と云つてゐるが、これはまさしく

私の作歌の傾向をはつきりと云ひ當てたものであつて、騷壇亦茲に一人の知己を得たりと感じた。

越中の八尾町には、昭和廿年二月から同年十月まで、およそ八ヶ月程淹留したが、もう既に戦争末期の絶望的な國情の中に在つて、殆んど見知らぬ人々を相手に暮らさなければならなかつたから、かなり暗澹たる日々を過さなければならなかつた。殊にこの年は數十年來の大雪で、私がこの山間の町に辿り着いた時には、家は悉く三丈あまりの積雪の下に埋もれてゐて、古びた旅館、暗い僧房などを轉々とした生活は、人生の辛酸そのものと云つてもよかつた。私のここの作品は、「寒行」の最後に「北陸雪中吟」として載せてある外に、この歌集には収録してないが、やや形式の變つた單行歌集「流離抄」と題するものが一卷ある。

その後私は、再び京都へ歸つて來たが、今度は轉入の手續が面倒だつたために市中に入る事が出來ず、京阪電車の石清水八幡驛から一里ばかり徒歩で往かなければならない、八幡町の町盡頭にある、淨土宗の一小刹の座敷を借りて住む事になつた。そこでは昭和廿三年の八月京都市上京區油小路通元誓願寺下ると云ふところに移るまで、およそ三年間を過したが、轉機といふ程ではないけれども、戦後この寶青庵といふ僧堂の一室で作つた歌は、聲調内容ともにこれまでのものよりは、沈潜した枯淡味が増して來たやうに自分でも感ずる。ここで作つた吟咏は、一部分歌集「殘夢」として上梓しただけで、他の大部分は今猶私の筐底にある。さういふわけでこの「殘夢」は、この時代の私の作品の全體を語るものではないと思つたので、わざとこの歌集からは割愛した。



私はその後、前記の上京油小路の家に住む事三年、昭和廿六年八月には、現在の銀閣寺に近い浄土寺石橋町に移つて来た。この家を「紅聲窩」と名づくる所以は、ここに居を定めると間もなく、不圖祇園花見小路に近い四條通りにある、或る小さな骨董屋の店先で、日頃私の愛好する洛陽の市井詩人中島棕隠の書いた、この三字の匾額を発見したためであつて、早速手に入れた私は、これを玄關の楣間に掲げ朝夕眺めて楽しんでゐる。

以上が私の五十年に亙る歌歴であるが、私の歌業はこれで終つたといふわけではなく、私の眞面目を傳へる本来の述作は、猶今後の努力にあると思つてゐる。昨年正月には新年の感懐として、

鐵齋は老いてすぐれし繪を描きぬ年のはじめに思ふことこれ

といふ歌を作つたが、鐵齋の繪を見てみると、だんだん晩年に近づくに従つて、その畫格は重厚となり、その筆觸は精緻となり、老來一層その氣魄に彊壯の度を加へてゐる。私のこの歌の意味は、今更説くまでもなからう。勇猛精進といふ言葉は、單に歌の上ばかりでなく、藝術はもとより人生全般に對する、私の年來の信條である。

昭和二十七年七月二十五日 第一刷發行 吉井勇歌集

臨時定價八拾圓



作者 吉井 勇

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地 岩波 雄二郎

印刷者 東京都青梅市根ヶ布三八五番地 山田 一雄

發行所 東京都千代田區 株式會社 岩波書店

昭和二十五年一月設定★一ツ拾圓  
昭和二十六年六月臨時★一ツ四拾圓

落丁本・亂丁本は  
お取替いたします

株式会社大化堂印刷・製本

納本



讀書子に寄す

—岩波文庫發刊に際して—

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に任せしめるであらう。近時大量生産預約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すや誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繋縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推舉するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、従來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亘つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價值ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は預約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も方を盡し従來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

岩波文庫新刊・近刊書（六月～八月）

既刊一九〇〇點 戦後復刊一〇六〇點

文庫定價 昭和二十五年一月設定★一ツ參拾圓 昭和二十六年六月臨時★一ツ四拾圓

□書目綜覽御希望の方は最寄書店でお求め下さい

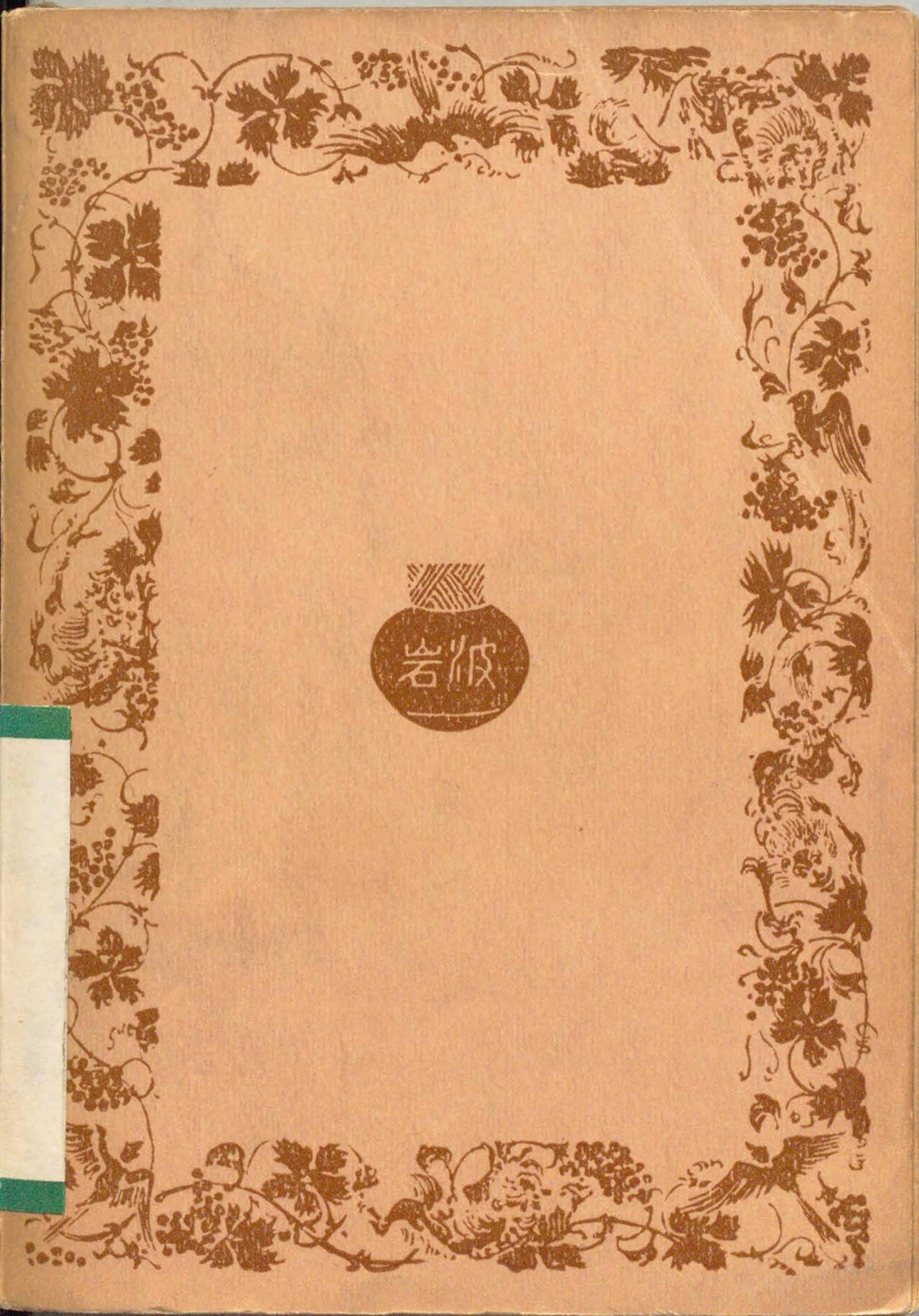
役の行者坪内逍遙作★	かものめチエーホフ作★
古い玩具他五篇岸田國士作★	ファイガロの結婚ボオマルシエ作★
抒情歌・禽獸他五篇川端康成作★	トニオ・クレエゲルトオマス・マン作★
黒潮徳富健次郎作★★	プリンス・オットー小川和夫譯★★
吉井勇歌集吉井勇自選★	サイラス・マアナー上巻G・エリオット作★
童話湖水の鐘他十篇鈴木三重吉作★	パルムの僧院下巻スタンダール作★★
集金のへび三篇後篇幸田露伴著★	増ギリシア抒情詩選吳茂一譯★★
風流微塵藏後篇幸田露伴著★	トム・ブラウンの学校生活上前川俊一譯★★
東の國から上下ラフカディオ・ヘルン作各★★	キーツ書簡集佐藤清譯★★
海賊パイロン作★★	



日月兩世界旅行記第一部 シラノドモルニラック作 ★★  
 ス テ ロウイニ作 ★★  
 ダンテ神 曲 地獄山川丙三郎譯 ★★  
 リイルアダン短篇集 上辰野隆選 ★★  
 斷 崖 第五篇 井上満譯 ★★  
 ビッヒ化學通信(二) 柏木馨譯 ★★  
 プラトン哲學 出・宮崎譯 ★★  
 哲學 入 門 武市健人譯 ★★  
 帝國主義論 下卷 矢内原忠雄譯 ★★  
 市民の國について 上卷 小松茂夫譯 ★★  
 金 枝 篇(五) 永橋卓介譯 ★★  
 フランスの内亂 木下治譯 ★★

☆ 近 刊 ☆  
 宇治拾遺物語 下渡邊綱也校訂 ★★  
 俳諧師・續俳諧師 高濱虛子作 ★★  
 デイヴイド・コパフィールド (五) 市川又彦譯 ★★  
 水 晶 手塚富雄譯 ★  
 カザノヴァ回想錄(二) 岸田國士譯 ★★  
 道德と宗教の二源泉 平山高次譯 ★★  
 玄朴と長英 他三篇 眞山青果作 ★★  
 キヤピテン・フラカス 上卷 田邊貞之助譯 ★★  
 永遠の夫 ドストエフスキイ作 神西清譯 ★★  
 千一夜物語 (八) 豊島・渡邊・佐藤譯 ★★  
 ク オ レ 上 柏熊達生譯 ★★  
 デイヴイド・ヒューム 人性論(四) 大槻春彦譯 ★★





岩波